



## はだかの王さま (11)

「どうか、神さま！」と、年よりの大臣は、心の中で祈りながら、目を大きくあけました。「や、や、なんにも見えんぞ！」

けれども、もちろん、見えない、とは言いませんでした。

「さあ、もっと近よってごらんください。いかがでございましょう。がらもきれいですし、色合いも美しいではございませんか」などと、



## はだかの王さま (12)

うそつきどもは、しきりに言いながら、からっぽの機を指さしました。

気の毒に、年よりの大臣は、なおも目を開いて見ましたが、やっぱりなんにも見えません。それもそのはず、機には、なんにもないのですからね。

「これは、たいへんだ！」と、大臣は思いました。「このわしが、



## はだかの王さま (13)

ばかだというのか。そんなことは、  
まだ考えてみたこともない。それ  
にしても、これは人に知られては  
ならん！ このわしが、役目にむ  
かんというのか。こりゃいかん。  
織物が見えないなどと、うっかり  
言おうものなら、たいへんだぞ」  
「いかがでございましょう。なん  
ともおっしゃっていただけませ  
んが」と、織っていたひとりが言



## はだかの王さま (14)

いました。「おお、みごとじゃ！

まことに美しいのう！」と、年  
とった大臣は言って、めがねでよ  
くながめました。

「このがらといい、色合いといい！

さよう、わしはたいへん気に入  
ったぞ。皇帝に、そう申しあげて  
おこう」

「それは、まことにありがたいこ  
とでございます」と、ふたりの機



## はだかの王さま (15)

織りは言いました。

それから、色の名前や、めずらしいがらの説明をしました。年とった大臣は、皇帝のところへもどっても、同じことが言えるように、よく気をつけて聞いていました。そして、そのとおりに申しあげました。

つづく

